

大学時報

U N I V E R S I T Y C U R R E N T R E V I E W

No.367

2016

3

隔月刊



教養を磨き、心優しく、共に未来を拓く力を（共立女子大学）

特集 少人数教育の効果と課題

座談会 大学図書館はこれからどうなるのか？

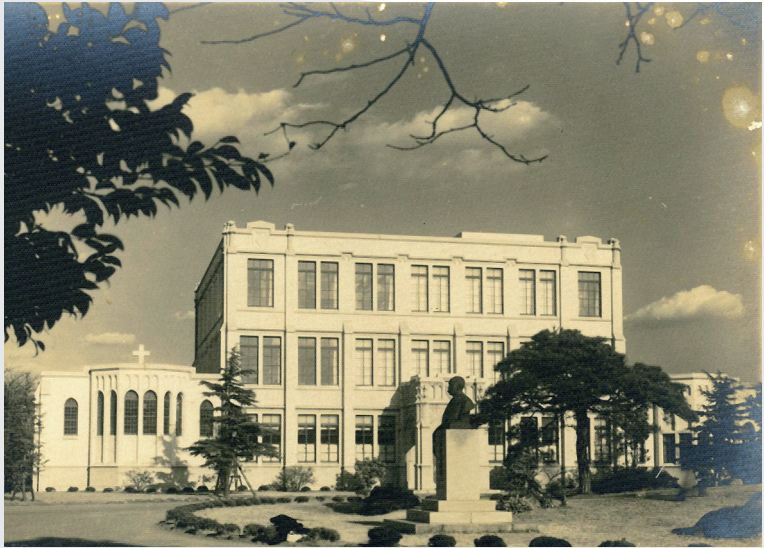
わが大学史の一場面 立正大学

加盟校の幸福度ランキングアップ 法政大学／関西大学／慶應義塾大学

クローズアップ・インタビュー 柔道家 野村忠宏さん

日本私立大学連盟

Thesaurus Universitatis



ペリーホール 1934（昭和9）年撮影



寄付者の名を冠した
チャールズ・オスカー・ミラー記念礼拝堂





共立女子大学・共立女子短期大学

KYORITSU WOMEN'S UNIVERSITY / KYORITSU WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

共立女子学園は、明治19（1886）年、女性の自立と社会的地位の向上を目指し、34人の先覚者を発起人として設立されました。その後、明治、大正、昭和の各時代を通じて今日まで、この建学の精神を基本として女子教育の歴史と伝統を築いてきました。

現在、国際化、情報化、高齢化などがさらに進み、時代が急速に変化していますが、そのなかで女性の高学歴志向と社会進出、男女平等社会の実現などの課題に応えるべく、女子教育の重要性はさらに増しています。

そのために、本学園では、「高い知性・教養と技能を備え、内外に広い視野を持ち、個性を発揮して活躍できる女性」、そして「温かく思いやり深い心を持ち、品位高く、人間味豊かに家庭や社会に貢献できる女性」の育成に総力をあげて取り組んでいます。



共立講堂と本館



アクティブラーニングで描く 学生たちの未来図 FD活動の一環として



共立女子大学・短期大学では、FD活動の一環として学部・学科や専門を超えた教員相互の交流を行っています。表紙でもご紹介したKALECO (Kyoritsu Active Learning Experience for Collaborative Communication) は、そうした教員同士の交流がきっかけで生まれました。KALECOは、全学教育のメリットを生かし、特定の世界でしか必要とされない技術ではなく、社会で最も必要とされる協調性あるコミュニケーション能力、遊び心のある発想力と誠実な実行力を養う独自のアクティブラーニングです。一人一人の力は限界があっても、さまざまな分野との協力で、予想もつかない結果が実現できる——2015年度に行った舞台公演はその最良のエクササイズでした。大学と教職員の役割は、押しつけるのではなく、学生のポテンシャルを目覚めさせ、それを最大化する教育環境を共同で構築することです。今後も、多様な課題解決型の教育内容を授業に採り入れてゆきたいと考えています。



共立女子大学・共立女子短期大学
KYORITSU WOMEN'S UNIVERSITY / KYORITSU WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

グローバル教育と地域連携の 可能性を広げる学生たちの「自ら学ぶ力」

国際交流



フルブライト日米教育委員会視察団の方々と学生との交流

地域連携



「浴衣 DAY」
今日は授業中も街の散策も浴衣で!

吹奏楽団－神田すずらん通り商店街「神田すずらんまつり」で演奏

サークル活動

ボート部－女子大学で唯一、
戸田漕艇場に艇庫を持つ



手話サークルボランティア活動も積極的に

新たな知の創造拠点

新2号館

8月に完成！

本学園では、大学・短期大学の教育・研究の再活性化と共立女子学園の飛躍発展を目的として、新2号館の建設計画を推進してまいりました。そして学園創立130周年を迎える本年8月、いよいよ竣工の時がやってきます。

新2号館では、「フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーション」と「ここでしかできない体験や経験」を重視した、「人・地域・社会」を密接につなぎあわせる次世代型の教育・研究環境を構築します。また、学生・教職員間の日常的かつ横断的な連携を促す交流空間や、図書館、博物館、講義室、体育室ほか学生のニーズに応じた多彩な教育・研究環境を整備し、共立女子学園の「新たな知の創造拠点」にふさわしい施設として生まれ変わります。



新2号館（完成予想図）



新2号館コミュニケーションギャラリー

共立女子学園 創立130周年
1886・ANNIVERSARY・2016



Cultivating, Collaborating and Creating for the Future

大学時報

No.367

2016.3



女性である前に

入江 和生 ● 共立女子大学・短期大学学長

1886（明治19）年に34人の人々が、女性が職業能力を持つ必要性を説いて本学を発足させてから、今年でちょうど130年になる。その説くところは、男性優位社会の枠組みの中でいかにして女性の力を活用するかといった発想とは無縁で、女性とは女性である前に一個の人間であるという事実を、血を吐くような激しさで言おうとしたものである。この基本理念を時代の流れのなかでさらに錬磨し、高めて、教育の場で生かしてゆくことが本学の使命に他ならない。

文学からの声——いま、大学教育を想う

安村 仁志 ● 中京大学学長

大学教育をめぐるのは、「質保証」「FD」「改革」「ガバナンス」「三つのポリシー」「グローバル化」「社会連携」「高大接続」「アクティブラーニング」「アウトカム」などの語が行き交い、各大学とも対応を迫られ、かなりのエネルギーを注いでいる。しかし、大事なものは、これらの課題への対応が外形的処理に終わらないようにしなければならないことである。また、同じような対応によって大学の画一化に陥らないように注意しなければならない。私は、これらの課題に通底する根本的なことを探り、できるだけシンプルに、おおらかに、しかしつながりを考えて向かいたいと思っている。

学長就任後、教職員・学生に伝えようとしたことは、多くはなかった。一つ目は、大学とは何かということについて、アメリカの碩学ヤロスラフ・ペリ

カンの「研究によって知を進歩させ、教育において知を拡大し、出版によって知を普及させること」との定義（『大学とは何か』法政大学出版会）を紹介し（三番目の「出版」は「社会発信」と読み替え）、これを追い求めていきたいということである。二つ目は、「大学の主人公は学生」とし（決して学生を神さまにするのではなく）、教員は研究に根差した教育に努め、職員は自覚的に学務・学生指導に当たり、学生も自主的に学業に励み、三者がそれぞれ自律的にベストを尽くそうということである。その結果、学生が卒業後の社会に向け《生きる力》を確実に身に付けられるようにすることである。

私がこの文章を書くに当たって心に留めている最大の関心事は、『人間とは何者なのだろう』『人間はどこに向かっていくのだろう』ということである。

これは、「今まで経験したことがないような」が冠に付く事象や地球環境の悪化の問題が次々と起こっている今日、『人を育てる』という重大な役割の一端を担う大学として、教育を考え、教育を進める上で常に念頭においておきたいテーマだからである。

そこで、本小文では三つの文学的作品を取り上げ、それらの発する声に耳を傾けながら大学教育について考えてみたいと思う。

一 『ロボット』からの声

チェコの作家カレル・チャペックが一九二〇年に発表した戯曲である。一〇〇年近くも前に書かれたとは思えないほど、現代に通じる予言的・默示的な作品である。また、「ロボット」という語が初めて登場したことでもよく知られる。robotは作家自身がチェコ語の robot a から造り出した。元の語のaを取っただけのように見えるが、「強いられた労働、賦役」「単調な骨折り仕事」が原意なので、よくぞと思う。人間はつらい仕事を軽減しようとして道具を開発したり、自分以外の人間や動物に代わりにやらせようと、奴隷や賦役といった制度をつくり

出した。しかし、それではいけないと、自然の力を借りた装置や、電気などの動力源を利用する機械を開発した（産業用ロボットはこの範疇）。今や人工知能が組み込まれたロボットまで造られている。労働人口の減少や少子超高齢社会を見据えると、ロボットへの依存度はますます高まるに違いない。われわれ教育に携わる者にとっても、この問題は避けて通れなくなっている。補助どころか、教育そのものをロボットのなものが行う時代にもなっている。

この作品の正式な題名は『R. U. R.』（Rossumovi univerzální roboti）であり、見た目には人間と見分けがつかない世界共通型ロボットを製造しているロツスム社（人間は幹部六〇七名だけで、他の従業員はすべてロボット）が舞台となつて物語が展開する。ロボットたちは極めて無機質的に働き、耐用年数が来ればお払い箱となることに何の不満も持っていない。そこへ同社の会長の娘がやってきて、その様子に衝撃を受け、何らかの感情を持った「人間的」ロボットにしてほしいと言う。設計者が少し回路をいじつてそのようなロボットができたところからロボットの反逆が始まり、遂にロボットが勝利し、ロボッ

トに同情的だった一人を除いて幹部は全員殺される。その過程で、先の娘が設計図を焼いてしまう。ロボットには生殖能力がなく、次の世代は設計図に基づいて生産するしかない。残った一人に思い出すよう懇願するがかなわず、終局を迎えるというストーリーである。さほど複雑な話ではないが、随所に人間の創造、バベルの塔を想起させる聖書的テーマ、労働と分配などの社会科学的テーマ、人が子を産まなくなるといった現代的テーマがちりばめられており、単なるロボットをめぐるSFではなく、人間および人間社会の在り方を問う質の高い物語である。

教育とロボットは、今日大きな問題となっている。人間の労働を代替あるいは補助するのがロボットであるとするれば、教育を補助する装置もある種のロボットと考えられる。その意味では、今日、コンピュータやスマートフォンを使うことによつて資料の検索・入手・作成が極めて楽になっている。また、試験も記述式からマークシート式、マルチチョイス型に傾斜している。教材や授業のデジタル化も進んでいる。すべての授業をインターネットで行うサイバー教育すらある。一方、これらは暗記・反復型の教育

を助長するだけとの懸念もある。一見すると知識の修得には早道と見えても、思考する要素が軽視されれば、それらの知識が本当に身に付き、応用に結びつくかどうか心配されるのである。

人工知能の発達は著しく、関連して「シンギュラリティー」という言葉も耳にする。正式には「技術的特異点 (Technological Singularity)」といい、テクノロジの急速な変化によつて人間の生活が大きく影響を受け、後戻りできないところまで達する時点のことを意味し、具体的には人工知能が人間の能力を超えて起こる、近未来のことだそうである。

今、大学の教育が種別化されようとしており、職業教育に特化した大学も登場してくる。極端なG(グローバル)型―L(ローカル)型といった分別化や、国立大学の三分類なども話題になっている。そうした環境の中で、特に私立大学はDP(ディプロマポリシー)―CP(カリキュラムポリシー)―AP(アドミッションポリシー)を明確にしていかなければならない。その場合、やはり教育は《人間》に関わることである以上、人間はどのような存在であるか、あるべきかの視点に立って、その在りようを求め、

具体化していかなければならないであろう。人工知能をあくまでも「人工」に留めるためには、本家の「人間」の質を高めることしかないことを思い、そこから教育を考えていかなければならない。そんなことを、この作品の《声》と感じとった次第である。

二 『人間の大地』からの声

次は、「大切なものは目には見えないよ、心で探さないと」というフレーズでよく知られる『星の王子さま』の著者サン・テグジュペリの『人間の大地』(Terre des hommes、一九三九)である。著者は飛行機乗りで、当時、かなりの範囲の世界を飛び回った経験の持ち主であった。これは、高い空から地球とそこに住む人間の生を見ろという、それまでになかった視点からの思索である。みずす書房版の第四章「飛行機と地球」にハッとさせられる記述がある。まず、「飛行機は一個の機械にはちがいないが、しかし、なんとという分析の道具だろう！ この道具はわたしたちに、大地の真の面ざしを発見させてくれたのだ」「じじつ、道路というものは、何世紀にもわたって、わたしたちをあざむいてきたのだ」とある。

後半はどういう意味だろうか。私の理解では、道路は地面に張り付いていて、平面的というか視点が下にあるという点で、飛行機が上空から大きく見るとは違うということを言っている。続いて、山や谷や川といった障害物を避けて通る曲がりくねった道路を歩いてものを見る場合、その奥で営まれている人間の生活が見えにくい——やや極端な比喩に思えるが、まるで女王が道をたどって視察しながら、実際に見ているのは道に接している部分や道に出てきた人間だけだというくだりがある。それに対し、飛行機はそれらの障害物を見下ろしながら、大きくかつ相互のつながりも見ることができると述べている。

われわれは、とかく直面する場面を道路から見ろように平面的に考えることに陥りやすいが、まず大きく全体を見渡し、次いでそれぞれの部分を見てつながりを読み取るようにしなければならないことに気付かされる。大学を巡る諸課題においても、それを平面的、外形的に考えるだけでなく、教育に関わる問題である以上、背後にある生の「にんげん」を意識しなければならないと思う。

ここでも、常にとどこかで『人間とは何者なのか』

を意識しつつ、その人間が生かされるような策を考えていかねばならないことを痛感する。制度や仕組みが冷たいものであっては、人は生かされない。また、今日、『人はどこへ向かっていくのか』が喫緊の課題になっていると思う。人類の存亡すら考えざるを得ない現象も多く、『いま』だけを切り切る視点では、先の世代への責任を果たすことができない。教育とはそういうことにつながるものだからである。

三 『ハリネズミと狐』からの声

これは、ラトビア出身の政治学者アイザイア・バーリンが、古代ギリシアの詩人アルキロコス（紀元前七世紀）の残した「狐はたくさんのことを知っているが、ハリネズミは一つだけでないことを知っている」という断片を巡って著した、トルストイの『戦争と平和』論である。興味深いのは、まず「一元主義」と「多元主義」という構図をイメージ化し、世界をただ一つの普遍的な原理によって理解しようとする人たちを「ハリネズミ族」として、ダンテ、プラトン、パスカル、ヘーゲル、ドストエフスキー、ニーチェなどを挙げ、多様な経験や現実をありのま

まに把握しようとする人たちを「狐族」と呼び、シェークスピア、ヘロドトス、アリストテレス、モンテーニュ、エラスムス、ゲーテなどを挙げていることである。トルストイは狐族でありながら、自らはハリネズミ族だと信じていたとしている。

一方、十三世紀のオドー（Odo of Cheriton）の寓話には、「多くの術を知っている狐と、たった一つの術しか知らない猫」という、狐が案外もろい話や、三〇〇の知恵を持っている狐と三つの知恵しか持たないハリネズミの話がある。知恵がありすぎてもろい狐、反対にわずかな知恵しかないにもかかわらず、それを使って危機を乗り越えるハリネズミの話である。私は、こうしたハリネズミ―狐論を借りて学生に話す。グローバル化の時代、幅広く学び、多彩な知に触れる必要があると同時に、得た知識を狐のように実際に使いきれないのではなく、確実に身に付け、適宜活用するよう勧める。仕事を含め、広く生きる力に結び付けられるよう自覚的に学ぶことを勧める。また、ハリネズミのように自分の専門分野の学びによってプロフェッショナルな知識を修得してほしいとも言う。

大学の教育はゼネラルな学びとスペシアルな学びから成り立っている。しかし、一九九一年の大学設置基準の大綱化によって区分が緩和され、日本中の大学で前者は急速に縮小に追い込まれた。そして近年は再び「教養教育」の意義に光が当てられている。

「一般教育」と、今日いわれる「教養教育」とは微妙に違いがあるように思われ、よく整理して考えなければならぬが、大綱化の波を経験した者として驚いたことは、一般教育縮小論、教養部廃止の動きが一気に進んだことに対して、大学も大学人も簡単に波にのまれてしまうある種の危うさを持っているということである。わが大学でも大きな議論となったが、最終的に出した方針は、教養部を存続させるとともに、全学のカリキュラム体系を一般教育と専門教育を併せて再構築することであった。当時としては、全国的にも珍しいケースであった。ただ、それで落着させるのではなく、今改めて広い意味で問われている大学教育の中の「教養教育」「リベラルアーツ教育」の要素をしっかりと考え直し、あるべき姿を求めていかなければならないと思っている。

狐型のように幅広い学びを通じて得た多彩な知識

をベースに、グローバルな要素も加味して判断力・適応力を身に付けるという意味での「教養」を大学教育の中に位置付けることは必須である。その点で、リベラルアーツの「リベラル」の意味づけは、職業に結び付けられることから「自由」で、人間として真の「自由」を使いこなせる素養であるという点にあることを改めて意識したい。同時に、ハリネズミ型のように質の高い専門性を身に付ける仕組み・内容を教育の中に示し、学生が実感できるようにしなければならぬ。そこに、メソッドとしてではなく、アクティブな学びの環境として「アクティブラーニング」も位置付けていきたいと思っている。

少々甘い文章になったかとも思うが、教育は「にんげん」と切り離して考えてはならない、喜怒哀楽をもつて生きる人間、次世代に責任をもつべき人間、社会が複雑さを増す一方で思考は単純化している今日の人間を意識して教育を考えなければとの思いで書いた。その意味で、人間とその営み、人間の生み出す文化を扱う文学からの問いかけに耳を傾けてみることにも意味があると思うのである。